



石門

心學道話

五篇

上

9
3895
13



門 19
號 3895
卷 13



學道之語五編卷之上

前席

季路問事鬼神子曰未能事人焉能事鬼神
死曰未知生焉知死

これハ繪緒先進の篇小むてりる章で玉極ありき
御ふありき。今これゆゑに乃懸ふりて
れ。まづこの季路と孔子の仲子乃中ても

藝陽 奥田壽太講話
東武 平野橘翁聞書

心學道語 卷上

五編 一

早稲田 大學 圖書館
藏 27.6.16 號
藏 書

そのゆゑに言ふ。さういふであまの行改定とらうのよや
 一もその申すに神佛とおもせぬ多うもせぬとらう人
 一もせよ。縁の末の内上りて言して居るうへに我先
 親や親の奉忌帯いとせぬ人いりやうか。それもち
 りちうとらうか。そのも縁や親公の神靈がうへに
 くとらうか。ちうとらうか。ちうとらうか。すもぬと
 あつてさうもさうや。神心小かちうとらうか。ちうとらうか
 それがうへにさういふであまの國の親を服従とらうか
 ちうとらうか。さういふの天と下や。ちうとらうか。さういふ
 ても今世間に八歳考もいり神子とせよと神ちう

一とらう。あんな様いふとさういふ又何所の爺さぬ
 弘法大師が衆うつておつておつておつておつておつて
 ちうとらうの婆さぬ小山の橋荷が衆うつておつておつて
 つげなるとそんな様もあつておつて肝魂とおつておつて
 全派と費しとらう。さういふとらうか。さういふとらうか
 やうとらうか。あんな様と標して奉中とらうか。さういふとらうか
 人も世間には多いものさやが。さういふとらうか。さういふとらうか
 神佛と神佛と神心とさういふとらうか。我らとらうとらう
 神仏とさういふとらうか。さういふとらうか。さういふとらうか
 トや丁度式所の負三人の嚙が親族でうへとらうか

心經道話 卷上 五教三二

ら苦しくおると。たぐくおろくおろく。裏の井の側
 へきて裸おろく。水垢離とて。横波の金毘羅様と。
 行りやうしげなる。南無阿弥陀仏。金毘羅大権現様。鼻が難
 産と。助け給へ。たぐい小児の命。らくとも。鼻が余心。助け
 ぬ。その心。乳。六世寒中。らごうで。日糸。つて。中せう。若
 又母子。も。サ。その。所。ニ。ツ。びり。や。その。乳
 一。金の。高。飛。を。く。ら。て。沙。林。前。建。中。せ。や。と
 一。心。お。ち。て。祈。る。お。と。障。子の。肉。う。う。鼻。が。穿。て。是
 八。事。一。か。く。ぬ。り。と。お。り。い。苦。し。い。中。う。う。い。ま。は。ハ
 中。く。ら。の。人。い。く。は。神。様。が。も。の。と。つ。て。や。ら。ぬ

して。そ。り。や。め。ん。中。り。な。ま。形。ド。や。ま。う。う。横。心。の。金
 毘羅。極。く。二。百。里。河。中。り。も。あ。る。と。い。う。れ。を。中。裸。う。で
 日。糸。が。く。く。して。マ。お。来。る。り。の。う。そ。う。又。お。喰。あ。て。映。し
 今。の。穴。も。あ。い。突。ま。る。け。内。う。う。全。の。鳥。飛。が。と。り。て
 マ。お。来。る。も。の。や。め。ど。ろ。よ。と。形。と。あ。ら。め。て。の。い。ま
 して。う。カ。ノ。男。が。小。い。さ。い。鼻。で。ハ。テ。サ。テ。そ。ら。ハ。合。鳥。乃
 日。の。い。お。ま。ぐ。ま。う。う。妙。り。あ。て。全。民。羅。と。軟。ま。う。ち。り
 そ。ら。い。ま。く。産。お。ま。き。と。い。う。さ。と。中。法。う。あ。る。う。大。て。い
 凡。夫。の。境。界。ハ。マ。ア。を。修。ま。い。の。よ。や。ま。と。妙。と。下。さ。う。う
 ら。何。く。と。扱。て。と。ま。せ。よ。は。あ。ま。と。叶。て。下。さ。う。う。妙。り。あ。る

と致すやふの何ぞ神様や佛様と信者者取揚婆乃格不
 思めて居る何れもいさるものトやあいつ神ハ形れもけ
 たりつんそんなるでござりてマア神の心心や仏の心心
 不かなよりの。さるふとつては一條ハ誰であらふよし常
 一故半詮成して並條にあつね大切なるもや
 それてまゝ孔子極く乗路がその一條と同きや一と
 のトや。そとて孔子の心言に未人ハ幸る一勝は
 要そ終鬼ハ幸つんと。あやせられと是ハとよりの心
 らき心神佛といふものハ元來形のあいのものい
 方に爲しう能ても是とも。あやせられは又何れも

能とも。あやせられれば心心おくるあの中かなりぬやら
 その心形持のたつねもの也その神佛の心あるら
 かるよやうもつらふらハそりやえらつどむらうい
 る。トやう。そきよりハマア眼のお小婆うさちの
 眼きて。あつらり世眼ハ見てつら。人ハ終幸あやう
 けさるがよ。そのまゝ形の見てある人のこらさ
 能るよやう幸あるこのお末ねりのが眼。えぬ
 神佛の心心。あるやうもつらふら。そりやと
 てもお末ねりのトやし。あやせられものトや。げん
 ありせられと心一云の中ハ。親もけま。主人もけ

人々神佛と云え来と云ふ。ちがうてあるのぞと云ふ。其
 の然らざる類のあらうの。かゝるものゝ現れて眼
 見して居るの。現るまじくも眼みよぬもの。ちがひ
 せうりて元の心根何れも遠くさるゝあいつゝ
 や。それハ世々との人の神仏と云えらるゝ
 別なるものの中。ゆりて居る。それで神佛
 しく人を欺して我をよまらやうなる考へたり
 佛様をしく人の妨げまらやうおる仕ある。己に
 先年らるる。浄法度の塵染と云ふ。ちがう
 奴が。あつてお己も。さるがうその罪がまじくから

や。俄小進所の言書。はては作不遠ていひ
 出せ乃あ来まにやうそのくすいあん長壽と云
 すやうなびうもあ。ありがうの四行繕と云ふ
 て下さるる。四行繕料ハ何れでも備へまはと云ふ
 ら。信持ハ何れも清念と云ふ。あその。聖日念
 又千又と云ふ。書の紙。五流。包て四行繕料と
 して持て来。しと云ふ。そこで信持ハその目より
 その仕持へして。護摩。佛。龍。つて。活油の法。と云
 づ。あつて七日。知りて。札。守。あ。と。丸。を。り。て。や。れ。と

外無別法。心佛及衆生。是則無差別。も然て心身りま
 け。ごよそ信及も奉む。初て六根清浄の旨と明らめ
 又眼の神。鼻安寧。して天地の神。と同根。万物の靈
 と同体。あるゆゑ。心合なるを。うま。せ。る。く。此。中。に
 り。よ。も。中。小。情。の。憚。い。人。に。や。つ。を。り。物。一。曰。入。て。イ。ヤ
 それ。ハ。大。方。む。う。の。ゆ。て。あ。ら。ふ。今。時。に。一。世。や。う
 お。う。ろ。つ。と。お。る。人。の。心。を。清。浄。な。神。仏。の。心。と。一。つ
 と。の。ト。や。と。の。ト。ス。そ。う。や。ご。よ。も。合。身。が。ゆ。ら。ぬ。と
 坤。の。い。ろ。と。う。ら。ふ。神。の。心。も。人。の。心。と。同。ト。り。の。の
 總。授。ハ。ア。ア。マ。ア。毎。年。く。の。其。乃。大。衆。礼。は。る。て

も考て。ゆらう。一。四。高。地。に。あ。ふ。及。び。派。系。で。も。大。坂
 でも。中。所。の。神。一。四。地。を。ま。つ。つ。て。山。下。や。乃。神。一
 や。乃。樂。車。ト。や。の。ト。一。と。の。ト。町。に。く。は。が。し。り
 又。種。く。な。道。り。物。や。通。り。の。あ。る。と。は。ま。ら。る。ト。や。が。と。れ
 が。み。ん。な。ん。も。ん。を。教。ん。ご。う。ん。も。心。の。衆。一。む。や。う。か
 る。も。り。あ。い。あ。し。を。ね。そ。の。う。く。何。お。の。神。乃。衆。う。で。あ
 ろ。う。と。神。車。の。才。一。と。神。衆。と。い。ふ。ゆ。が。あ。つ。て。大。勢
 の。社。人。う。よ。う。て。笛。や。大。鼓。で。ヒ。ウ。く。ド。ン。く。樂。一。と。る
 と。向。輪。と。形。く。傍。の。う。に。は。と。中。う。な。女。中。が。出。て。禪。と。ま
 て。ま。て。舞。を。れ。う。う。又。あ。い。よ。う。て。ハ。舞。樂。の。一。つ。る。ま。も

菓子^この^り後^ごさうに^ん入^りる^か方^{かた}ハ。さうな^り人^{ひと}の方^{かた}へ^むけて^るを^んん
 採^との方^{かた}ハ^な牛^{うし}の^し串^{くし}や^な菜^{さい}苞^{ほう}乃^{なり}喰^くも^もで^ね方^{かた}が^むけて
 あ^る。つ^まま^まと^んの^り口^{くち}々^々ぬ^り小^こ理^り居^ゐても^もつ^ま人^{ひと}の^り口^{くち}々^々
 も^のの^りや^な全^{ぜん}作^{さく}佛^{ぶつ}へ^んと^も心^{しん}を^ん一^{いつ}體^{たい}く^るの^り口^{くち}々^々
 花^{はな}も^も更^{さら}く^くし^しの^り方^{かた}と^つら^らく^く白^{はく}け^け候^{こう}や^な菓^{くわい}子^しの^り後^ご
 り^のも^も裏^{うら}の^り後^ごさう^{さう}ふ^ふ思^しく^くる^り方^{かた}と^あら^らく^く白^{はく}て^て候^{こう}
 さ^あら^らも^もの^り口^{くち}々^々と^つら^らく^くも^もま^まと^と。それ^が其^{その}の^り後^ごの^り口^{くち}々^々
 ら^ぬ理^り居^ゐと^らふ^りの^り口^{くち}々^々や^あせ^せられ^るが^もち^もあ^らく^くあ^らる^る人^{ひと}
 乃^{なり}眼^{がん}と^も私^{わたし}を^んす^すの^り口^{くち}々^々や^つら^らく^く乃^{なり}の^り眼^{がん}と^も私^{わたし}を^んす^すの^り人^{ひと}
 心^{しん}と^も樂^{らく}し^しや^らぬ^ぬの^り口^{くち}々^々や^つら^らく^く乃^{なり}の^り心^{しん}と^も樂^{らく}し^しや^らぬ^ぬの^り口^{くち}々^々

とう^とう^う乃^{なり}理^りが^あら^らく^くわ^わく^くと^とや^や。そ^そま^まと^と今^{いま}日^{にち}の^り口^{くち}々^々な^な
 つ^つら^らく^くて^てる^るし^し神^{しん}仏^{ぶつ}ハ^ハ世^せ界^{かい}中^{ちゆう}の^り人^{ひと}の^り親^{おや}で^で人^{ひと}ハ^ハ又^{また}神^{しん}仏^{ぶつ}
 可^かま^まへ^へま^まと^とや^や。それ^でも^もその^り親^{おや}乃^{なり}心^{しん}と^も私^{わたし}を^んす^すの^り口^{くち}々^々
 ば^ばら^らその^り子^こと^も移^{うつ}か^かして^て可^かま^まへ^へま^まと^とや^や。それ^でも^もその^り親^{おや}乃^{なり}心^{しん}と^も私^{わたし}を^んす^すの^り口^{くち}々^々
 喰^くして^てや^やら^らく^く。その^り親^{おや}ハ^ハ自^じ身^{しん}ハ^ハ喰^くいて^も亦^{また}多^たく^くつ^つ
 て^て飲^のぶ^ぶも^もの^り口^{くち}々^々や^や。そ^そま^まと^と親^{おや}ハ^ハ自^じ身^{しん}ハ^ハ喰^くいて^も亦^{また}多^たく^くつ^つ
 その^り口^{くち}々^々。おん^んも^も喰^くて^て例^{れい}ハ^ハマ^マヂ^ヂく^く見^みて^てお^おいて^て
 其^{その}の^り親^{おや}乃^{なり}く^くら^らく^くハ^ハ喰^くき^きも^も飲^のむ^むも^もす^する^るの^り口^{くち}々^々や^や
 へ^へあ^あら^らく^くる^るの^り口^{くち}々^々や^や。それ^がお^おな^なら^らく^く中^{ちゆう}お^おう^うく^くと^とあ^あら^らく^くる^るの^り口^{くち}々^々
 あ^あら^らく^くる^るの^り口^{くち}々^々の^り口^{くち}々^々ハ^ハお^おな^なら^らく^くる^るの^り口^{くち}々^々ハ^ハお^おな^なら^らく^くる^るの^り口^{くち}々^々

差別のつらから独りつらるるゆへアノ芝居あど思ふこと
 で考へてゆらうと出る芝居どもトヤと小座乃
 中の足物ハあし方しく考案つて居るこゝゆへ
 その中へいろいろの人があつて其の世帯へ其の
 習性もあまばま一向純な方の利ぬ人も居り
 其のおつらつらと方の違ふ人もおれ又おちほぬ
 方の老りを感ずる人もあり端もあつてあまよ人もお
 生ハ釋さつと好人もありしてその方音もあつらう
 おまうが、つらけきと向ふの音基とする程乃理
 及と知向る知意へあつてあんなも異りへあつて向ふに

あつるる悲しむる時ハ皆一統ハアつたれなる
 しるすトヤとあり又悟作なき程のあつる時ハ
 巧悟作なき地のあつるトヤとあり。それと一ツ皆さん
 の能見あつてあつるるゆへアノ忠臣蔵乃
 芝居に及ぶ清とら又百姓ハ七十をうらふ。よがく
 しと親にトヤとあつるる程とあつて又拾あ金の様
 中して釣焼ともして山路とあつてあつるるゆへ
 後の指叢乃落く定丸希とらあつる者あつてあ
 うけライク親父どのとあつるるゆへあつるるゆへ
 と老人の一人様とらあつるるゆへあつるるゆへ

る人でも若人でも悪人でもさらさらの世話もあ
 ねるよ梅の巻をさらさらと喰ふとつてア少く
 仕形トやと構むよちぢいあはれをとり中意切や
 盗賊どもが思ふところア定ぬ希ハ皆ひきまらおれも
 丁度そのとつと。押のいさあるそのあれど中
 さうあつよりのトやういそもやつをう盗をさうして
 構むにちぢいハあはれう中せね又与一き藩がぶうく据よ
 てあわののしとらると。どんるりのでも何ト申ふ不便
 がつよ遠いハあい又アノ芝居小普呂平なるものよ是
 怪があて家老大里由良の船のあへよと突た平又百石

心石あさる。あはれと様でも又あふ二人扶持のつらと
 りその怪だや。と今ハ一ツの思ふよるハあはれうをせ
 めうハあはれ後と。はらんでやりとも心荷物をかひので
 かりとも款討の心付小なつまうれて下されとわが
 一轍小。くりかこまらうと程とはてあつとト若人の
 勿論ぞんぶ。うんねん人でもアあまぞくを
 の人トや情もア。ありあつと何とさうさ
 遠いあはれお孝子や忠臣の愛慕よ若しんど
 王様ない愛理おせうとて我子とあひよかけあど
 の愛い程と。すののこらうと情とさうさうあ

捕まゝに又そのもので。何のほりよ色あはがえとな。
 して知恵ちえ乃な且な那なと押おしららどどつつううでで未ま世せ未ま
 代の業わざささうう又また幽ゆうくく由ゆ并びやう西せい宮みやうああどど有あくく事こと々
 争あひあひあううその美うハハ初はりりややせせぬぬうう妻め女によをを平へい記きううつつよ
 假か名な本ほんとと續つててううるるととそそききハハくくおおととうう一いのの女によののつつ
 か一いののつつここんんるる事ことききとと肝かん腎じんなな知ち恵えのの且な那なと
 押おしららととああんんるる阿あ房ぼうおおりりととしてして後のちにに女によ子こ供く
 ああややでで笑わらひひままるる中ちゆうるる浅あさるる一いのの一いののたためめてて仕しららふ
 こここころろハハ利り及じきををささるるううおおりりととややううてて人ひとにに務むままるる賢けん
 いいののうう道どうとと知ちららぬぬとと人ひとにに賄まわききとと阿あ房ぼうななりりとと仕しららふ

以もののどどややささううううるるとと道どうとと知ちららぬぬ小せう人にんののがが一いののたためめ
 利りひひるるハハああんんややうう養かうりりままるるこころろででおおいい御ご法ぽう度どのの慶けい金きん
 銀ぎんととああららうう係けい書しよ録ろく判はんとと志しととうう人にんとと編へん局きよくたたりり換かへへるる
 欺き祿ろく事こと工こうむむととのの小せう人にんととううるる阿あ房ぼうとといいふふととののおおい
 大だい方ぽう利りひひるるがが一いのの奴やつととのの中ちゆうににままるる事ことああららひひののどどや
 それそれががおおももつつととううととうう方ぽうのの家け来らいがが系けい録ろくとと知ち恵えのの
 且な那なとと押おしららるるののでで美うハハ小せうがが一いのの大だいるる麻まととつつよよのの
 トトややぞぞのの派はいハハそのその若わかもも始はりりうう。そのその中ちゆうににままるる事ことささるる
 ととああららひひとと知ちららぬぬののででううららひひののどどやや知ち恵え乃な且な那なハ
 西せいののううりりややくくとと知ちららぬぬととああららひひののどどやや知ち恵え乃な且な那なハ

といふものゝあつて終つてね。さういふと終つても儘
 道でも佛屋でも正法の修行のつよみのハ只正法の
 知恵といふものと知て。それを磨く修行するより
 外の用いらぬのトヤ。そき小學問とさくつてバけんぞ
 大造書物でも禱で減他小小賢てよ。あつてふし思
 ふてある。それが大きなる等ちらひトヤ書物よむの
 小賢らふるるるトヤおい知恵を磨つて小る廉の
 大賢らふるるのトヤ。尚門ノ幸心と知つてつのも
 早きその為の又用トヤ幸心知つてねと正法の知
 恵といふものが知まぬわく磨くよといふてもみだり

中りが知まぬトヤ。鏡研が鏡と研みと思ふてもマア
 その鏡とよく取むしと未だ研くハ未だ未だ中る
 そのトヤ。とくを修成もむむ知て正法の知恵と云
 りのよとわくわくあつて中をせらう。世の中も大賢の
 知しやにようそ。さうくさると一應正法の端と知
 て。どよりかろうそ。世の取らうしとさうまが附くまで
 モウけ修行の海とさうのやうにありよ。四方も。うらみの
 トヤ。又云。強なる大なる遠いトヤ。ちねなる大
 る人よ。かたうそ。神とつよみのハおいぬめトヤの佛のよ
 りのいぬめのトヤ。のちまよふの是もあつてのとらつる

